『力ある方が私に』（ルカの福音書 1 章 39-56 節）2020.12.6.

＜はじめに＞ 何を幸せだと感じますか。人によって何を喜び、幸いと思うかには開きがあります。それを分かち合おうとしても、通じ合わないとかえって対立してしまうことさえあります。共に喜ぶには、同じところに立つ必要があります。この物語からその鍵を見出しましょう。

Ⅰ　聖霊に満たされ(39-45)

①急ぐマリア(39-40)

マリアの住むナザレ(26)から山地にあるユダの町までは、直線でも約 100 kmあります。何のためにユダの町に行ったのでしょう。急いで行ったことに、マリアのどんな思いを感じ取れますか。エリサベツに会って、マリアはどんな挨拶の言葉を掛けたのでしょう。

②聖霊に満たされ(41)

エリサベツがマリアの挨拶を聞くと、まず胎児が喜び躍り、エリサベツも聖霊に満たされました。彼は「母の胎にいるときから聖霊に満たされ」(15)と御使いが告げています。続くエリサベツの言葉も合わせて「聖霊に満たされる」について思い巡らして見ましょう。

③エリサベツの言葉(42-45)

マリアは挨拶しただけですが、エリサベツはマリアの身に起こっていることを告げます。これらは聖霊が彼女に示されたのです(ヨハネ15:26、16:13-14)。彼女は神の御業を共に喜び、その実現を信じた人を祝福します。聖霊によって、このような語らいができるのです。

Ⅱ　私を幸いな者と(46-49)

①マグニフィカート

マリアも語り始めます。マグニフィカートと称されるこの賛歌は、ハンナの祈り(Ⅰサムエル 2 章)や詩篇の聖句が散りばめられています。マリアも「聖霊があなたの上に臨み」(35)と御告げを受けており、御言を思い起こさせる聖霊の働きは、人から人へと共振します。

②主を大きくする

「あがめる」は magnify(拡大する)です。それは、神を讃え(=大いに喜び 47)、主の力と偉大さを認め(49)、主の御前で自分を小さくすること(48)によってです。ただ自己卑下し、卑屈になるのではありません。御前にて、自分のありのままの姿を直視し、へりくだるのです。

③目を留めてくださる主

そんな小さな者に、主は目を留めて(48)、大いなることを計画されます(49)。マリアの計画とは異なりますが、彼女は主を優先し、心から喜びます。自分にこだわらず、神にこだわり、神をほめたたえる朗らかさも聖霊の御業です。

Ⅲ　主のあわれみ(49-56)

①2 つのグループ

マリアの賛歌は普遍的な真理へと進みます。50-53 節には 3 組の対比が描かれています。低い者・飢えた者は主を恐れる者と、権力のある者・富む者は心の思いの高ぶる者と結び付けられます。どうしてそう言えるのでしょうか。

②神による逆転

主が立ち上がられ働かれると、両者の立場が逆転します。一方には災いですが、他方には救いです。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える」(ヤコブ 4:6)方です。この大原則は、しばし破られていても必ず実現します。

③主はあわれみを忘れず

あわれみは「真実の愛」とも訳され、相手がどうであろうとも揺るがない恩顧です。それを示すためにイスラエルに目を留められました。幾度も神を押しのけ、後ろに投げ捨てた民に、神はご自身の聖さと真実をもって忘れ去れませんでした。

＜おわりに＞ マリアもエリサベツも主のあわれみによる幸いを実感し、互いに分かち合い、主をあがめています。彼女たちの間で交わされた神の御業を喜ぶ語らいは、聖霊による賜物です。私たちの礼拝も語らいもこのようであるでしょうか。(H.M.)